

【D年】聖霊降臨節第16主日(2024年9月1日)

【旧約聖書日課】エレミヤ書 28章1~17節

¹その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の五月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが、祭司とすべての民の前でわたしに言った。

²「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしはバビロンの王の轡を打ち砕く。³二年のうちに、わたしはバビロンの王ネブカドネツァルがこの場所から奪って行った主の神殿の祭具をすべてこの場所に持ち帰らせる。⁴また、バビロンへ連行されたユダの王、ヨアキムの子エコンヤおよびバビロンへ行ったユダの捕囚の民をすべて、わたしはこの場所へ連れ帰る、と主は言われる。なぜなら、わたしがバビロンの王の轡を打ち砕くからである。」⁵

⁵そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。

⁶預言者エレミヤは言った。

「アーメン、どうか主がそのとおりにしてください。ように。どうか主があなたの預言の言葉を実現し、主の神殿の祭具と捕囚の民すべてをバビロンからこの場所に戻してください。⁷だが、わたしがあなたと民すべての耳に告げるこの言葉をよく聞け。⁸あなたやわたしに先立つ昔の預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。⁹平和を預言する者は、その言葉が成就するとき初めて、まことに主が遣わされた預言者であることが分かる。」¹⁰

¹⁰すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた。¹¹そして、ハナンヤは民すべての前で言った。

「主はこう言われる。わたしはこのように、二年のうちに、あらゆる国々の首にはめられているバビロンの王ネブカドネツァルの轡を打ち砕く。」¹²

そこで、預言者エレミヤは立ち去った。

¹²預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から轡をはずして打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。

¹³「行って、ハナンヤに言え。主はこう言われる。お前は木の轡を打ち砕いたが、その代わりに、鉄の轡を作った。¹⁴イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、これらの国すべての首に鉄の轡をはめて、バビロンの王ネブカドネツァルに仕えさせる。彼らはその奴隷となる。わたしは野の獣まで彼に与えた。」¹⁵

¹⁵更に、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。

「ハナンヤよ、よく聞け。主はお前を遣わされていない。お前はこの民を安心させようとしているが、それは偽りだ。¹⁶それゆえ、主はこう言われる。『わたしはお前を地の面から追い払う』と。お前は今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」¹⁷

¹⁷預言者ハナンヤは、その年の七月に死んだ。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 5章10~21節

¹⁰神の子を信じる人は、自分の内にこの証しがあり、神を信じない人は、神が御子についてなされた証しを信じていないため、神を偽り者にしてしまっています。¹¹その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです。¹²御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。

¹³神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたからです。¹⁴何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。¹⁵わたしたちは、願い事は

何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既になんかえられていることも分かります。¹⁶死に至らない罪を犯している兄弟を見たら、その人のために神に願いなさい。そうすれば、神はその人に命をお与えになります。これは、死に至らない罪を犯している人々の場合です。死に至る罪があります。これについては、神に願うようには言いません。¹⁷不義はすべて罪です。しかし、死に至らない罪もあります。¹⁸わたしたちは知っています。すべて神から生まれた者は罪を犯しません。神からお生まれになった方が、その人を守ってください、悪い者は手を触れることができません。¹⁹わたしたちは知っています。わたしたちは神に属する者ですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。²⁰わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエスキリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。²¹子たちよ、偶像を避けなさい。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 8章31~47節

³¹イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。³²あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」³³すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今まただれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」³⁴イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。³⁵奴隷は家にいつまでもいるわけにはいかないが、子はいつまでもいる。³⁶だから、もし子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる。」

³⁷あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。³⁸わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。」

³⁹彼らが答えて、「わたしたちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。⁴⁰ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。⁴¹あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。」そこで彼らが、「わたしたちは姦淫によって生まれたものではありません。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」と言うと、⁴²イエスは言われた。「神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣わしになったのである。⁴³わたしの言っていることが、なぜ分からないのか。それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。⁴⁴あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、その父だからである。⁴⁵しかし、わたしが真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない。⁴⁶あなたたちのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。わたしは真理を語っているのに、なぜわたしを信じないのか。⁴⁷神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 28章1～17節

1 その同じ年、ユダの王ゼデキヤの治世の初め、第四年の第五の月に、主の神殿において、ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤが祭司たちとすべての民の前で私に言った。

2 「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私はバビロンの王の轆を打ち砕く。3 二年のうちに、バビロンの王ネブカドネツァルがこの場所から持ち去ってバビロンに運んだ主の神殿の祭具をすべて、私がこの場所に持ち帰らせる。4 また、バビロンに行ったユダの王であるヨヤキムの子エコンヤ、およびユダの捕囚の民をすべて、私がこの場所に帰らせる——主の仰せ。私がバビロンの王の轆を打ち砕くからだ。」

5 そこで、預言者エレミヤは主の神殿に立っていた祭司たちとすべての民の前で、預言者ハナンヤに言った。6 預言者エレミヤは言った。「アーメン、どうか主がそのとおりしてくださるように。あなたが預言した言葉を主が実現し、主の神殿の祭具とすべての捕囚の民をバビロンからこの場所に帰らせてくださるように。7 だが、私があなたとすべての民の耳に告げるこの言葉をよく聞け。8 昔からあなたや私に先立つ預言者たちは、多くの国、強大な王国に対して、戦争や災害や疫病を預言した。9 平和を預言する者は、その言葉が成就したときに、本当に主が遣わされた預言者であったと分かる。」

10 すると預言者ハナンヤは、預言者エレミヤの首から轆の横木を外して、打ち砕いた。11 そして、ハナンヤは民すべての前で言った。「主はこう言われる。私はこのように、二年のうちに、すべての国民の首からバビロンの王ネブカドネツァルの轆を外して打ち砕く。」そして、預言者エレミヤは立ち去った。

12 預言者ハナンヤが、預言者エレミヤの首から轆の横木を外して打ち砕いた後に、主の言葉がエレミヤに臨んだ。13 「行って、ハナンヤに言え。『主はこう言われる。あなたは木の横木を打ち砕いたが、その代わりに鉄の横木を作ることになる。14 イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。私は、これらのすべての国民の首に鉄の轆をはめて、バビロンの王ネブカドネツァルに仕えさせる。そこで彼らは彼に仕える。私は野の獣まで彼に与えた。』」

15 さらに、預言者エレミヤは、預言者ハナンヤに言った。「ハナンヤよ、よく聞け。主はあなたを遣わされていない。あなたは偽ってこの民を安心させようとした。16 それゆえ、主はこう言われる。私はあなたを地の面から追い払う。あなたは今年のうちに死ぬ。主に逆らって語ったからだ。」

17 預言者ハナンヤは、その年の第七の月に死んだ。

ヨハネの手紙一 5章10～21節

10 神の子を信じる人は、自分の内にこの証しを持っています。神を信じない人は、神を偽り者になっています。神が御子についてされた証しを信じないからです。11 この証しとは、神が私たちに永遠の命を与えてくださったということです。そして、この命は御子の内にあります。12 御子を持つ人は命を持っており、神の子を持たない人は命を持っていません。

13 神の子の名を信じるあなたがたに、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠の命を持っていることを知ってほしいからです。14 何事でも神の御心に適うことを願うなら、神は聞いてくださる。これこそ私たちが神に抱いている確信です。15 私たちは、願い事を何でも聞いてくださると知れば、神に願ったことは、すでにかえられたと知るのです。

16 もし誰かが、死に至らない罪を犯しているきょうだいを見たら、神に願いなさい。そうすれば、神は死に至らない罪を犯した人に命をお与えになります(別訳→その人は死に至らない罪を犯した人に命を与えることになります)。しかし、死に至る罪もあります。これについては、願い求めなさいとは言いません。17 不正はすべて罪ですが、死に至らない罪があります。

18 神から生まれた人は誰も罪を犯さないことを、私たちは知っています。神から生まれた人は自分を守り(異本→神から生まれた方がその人を守ってください)、悪い者がその人に触れることはありません。19 私たちは神から出た者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。20 しかし、神の子が来て、真実な方を知る力を私たちに与えてくださったことを知っています。私たちは、真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神であり、永遠の命です。21 子たちよ、偶像から身を守りなさい。

ヨハネによる福音書 8章37～47節

37 あなたがたがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたがたは私を殺そうとしている。私の言葉を受け入れないからである。38 私は父のもとで見たことを話しているが、あなたがたは父から聞いたことを行っている。」

39 彼らが答えて、「私たちの父はアブラハムです」と言うと、イエスは言われた。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をしているはずだ。40 とところが、今、あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに語っているこの私を殺そうとしている。アブラハムはそんなこととはしなかった。41 あなたがたは、自分の父と同じ業をしている。」そこで彼らが、「私たちは淫らな行いによって生まれたものではありません。私たちにただひとり父がいます。それは神です」と言うと、42 イエスは言われた。「神があなたがたの父であれば、あなたがたは私を愛するはずである。なぜなら、私は神のもとから来て、ここにいるからだ。私は勝手に来たのではなく、神が私をお遣わしになったのである。43 私の言っていることが、なぜ分らないのか。それは、私の言葉を聞くことができないからだ。44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は初めから人殺しであって、真理に立ってはいない。彼の内には真理がないからだ。悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、偽りの父だからである。45 しかし、私が真理を語っているのだから、あなたがたは私を信じない。46 あなたがたのうち、一体誰が、私に罪があると責めることができるのか。私が真理を語っているのに、なぜ私を信じないのか。47 神から出た者は神の言葉を聞く。あなたがたが聞かないのは、神から出た者でないからである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月1日「聖霊降臨節第16主日」の日課主題は「神に属する者」。

・旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、預言者エレミヤが預言者ハナンヤと対峙した逸話箇所。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、本書末尾の勧めの箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「アブラハムの子孫」をめぐる対話の箇所。

旧約日課(エレミヤ 28 章より)

・「エレミヤ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第二に置かれた預言文書。南王国ユダの最末期、王たちに仕えた宮廷預言者エレミヤの預言の書としてまとめられているが、「イザヤ書」や「エレミヤ書」のように年代順に整えられて構成されているわけではない。また、最終章(52章)に置かれているのは、エレミヤの預言ではなく、「列王記下」24:18～25:30と同じ内容(同じ本文)であり、この点は「イザヤ書」36～39章の構成と類似している。本預言書で「預言者エレミヤ」は、「ベニヤミンの地のアナトの祭司ヒルキヤの子」(1:1)と明示されており、同時に、ヨシヤ王の治世13年(前623年頃)以降、南王国最後の王ゼデキヤの時代に都エルサレムがバビロニア王ネブカドネツアル(ネブカドネツアル)の攻城によって破壊される(前587年頃)まで、一貫して王に仕える宮廷預言者の地位にあったことが示されている。その出自から、旧来のエルサレム神殿祭司の家系ではないことが明らかであるが、ヨシヤ王の時代に行われたとされる改革の担い手として宮廷に招聘されていたと考えられる。ヨシヤ王の時代(治世=前640～609年頃)は、それまで長年にわたって覇権国として権勢を誇っていたアッシリアが急速に衰退しメディアおよび新興のバビロニア(カルデア人)によって滅亡(前609年頃)、代わってバビロニアが覇権国となっていく時代である。ヨシヤ王は、この新興バビロニアに同調し、事実上の同盟関係に入ることを推し進めていたと考えられるが、他方で、かつての宗主国アッシリアの覇権を引き継ごうとするエジプトに接近する勢力も南王国宮廷には存在していた。南王国末期の国内政治は、この親バビロニア派と親エジプト派の権力抗争に明け暮れており、最終的には、最後の王ゼデキヤが親エジプト派に与したことに對してバビロニア王がエルサレムへの進軍攻城を決断し、王国の滅亡を迎えることになった。ただし、王国滅亡の11年前(前598年頃)、南王国が事実上バビロニアの支配に下った際、王位に就いたばかりだったヨヤキン王はバビロンに移されており、南王国はバビロニア王の下で事実上の二重王権状態に置かれている。本預言書の標題によれば、預言者エレミヤは最後、このバビロンに移されたヨヤキン王に仕える者ではなく、飽くまでエルサレムで立てられたゼデキヤ王に仕える宮廷預言者であった。

・日課箇所は、親バビロニア派の預言者エレミヤが、親エジプト派の預言者ハナンヤと対峙し、預言対決をした逸話として伝えられている。預言者ハナンヤについては、「ギブオン出身の預言者、アズルの子ハナンヤ」という出自が明示されているほか、本預言書中でその子や孫と推認される人物が登場する(36:12、37:13)。ギブオンは、ベニヤミンの地に位置するが、古くからの聖所とされ、預言者サムエルの時代にシロの神殿が失われた後、ダビデがエルサレムに「神の箱」を安置する幕屋を設けるまで、「主の神殿」として位置づけられていたともされる(代上21:29)。また、エルサレム神殿祭司の正統的家系であるツァドクの家との関係も示唆されている(代上16:39)。おそらく、預言者ハナンヤは、エルサレム神殿およびユダ王国宮廷に対して、古い時代から強い影響力を保ってきた祭司一族の者なのだろう。

・日課箇所冒頭で用いられる「ユダの王ゼデキヤの治世の初め(ベレーシート)」は、本預言書で繰り返し用いられる表現(26:1、27:1、28:1、49:34)。この「初め(ベレーシート)」は、「創世記」冒頭の「初めに」と同じ表現で、これらの箇所以外の用例はない。本預言書での用例は、「ゼデキヤの治世第一年」とも解されるが、続いて「第四年」の表示があり、おそらく「第一年」とは別の意図で「初めに」という表現が用いられている。すなわち、「神が天地を創造された初め」(創1:1の直訳)の状態として提示される「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」(創1:2)という状態の始まりを、「ゼデキヤの治世」に見ているのであろう。

使徒書日課(Ⅰヨハネ5章)

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ文書集」に含まれる文書。書簡文書として扱われているが、書簡の冒頭および巻末にあるべき定型の様式は完全に欠落しており、実際には書簡の形式を取らずに教会共同体内で教書として回覧されるために作成された可能性が高い。定説では、「ヨハネの福音書」の改訂過程で指針を示すために作成されたと推認されている。日課箇所は、本書の巻末部で、「神の子の名を信じている者」とよっての確信を確認する内容となっている(11節、18～20節など参照)。

・9節10節11節の「証し(マルテュリア)」は、本書ではこの三例のみであるが、新約文書の中でも「ヨハネ福音書」で特異的に用いられる用語。この語の動詞形「証しする(マルテュレオー)」も同じ傾向。

・16～17節の「死に至る罪」と「死に至らない罪」は、しばしば教理論争の的とされる。ヨハネが問題にする「死」は、生物学的な死ではなく、信仰における「永遠の命」からの脱落である。これを、ヨハネは、来世的な理解をしておらず、すでに「永遠の命を得ている」(13節)というように現世的、地上的な現実として理解している。ヨハネが現実と考えている「永遠の命」すなわち救いは、共同体論的な視座の中にある。

福音書日課(ヨハネ 8 章より)

・日課箇所は、本福音書中「仮庵祭」の場面設定の中に置かれた対話集の一部で、この場面の第二の部分の中間部を構成している。この前段(8:12~30)では、主イエスが「わたしは世の光である」(12 節)と告げられたことに端を発した対話が展開され、「わたしはある(エゴ・エイミ)」(24 節、28 節)ということが議論の中心に据えられていた。この「わたしはある」という論題は、しばしば、「出エジプト記」で神がモーセに自己表示として告げられた「わたしはある。わたしはあるという者だ」(出 3:14)を踏まえたもので、主イエスが旧約の「主なる神」と自身を同一視した自己表示であるとみなす場合があるが、必ずしもそのように断定できない。本福音書では、「わたしは〇〇である(エゴ・エイミ・〇〇)」という主イエスの自己表示表現が多様に取り上げられており、端的には、この前段部で問われている『「わたしはある」ということ』とは、主イエスが何者であるかを問うものであると解するほうが自然である。

・日課箇所、主イエスの「真理はあなたを自由にする」という言説(31~32 節)に対してユダヤ人たちが「わたしたちはアブラハムの子孫です…」(33 節)と反論する件は、前段の議論と無関係に始められており、元来は別個の対話譚であったとも考えられる。ここでの論点は、ユダヤ人たちの「アブラハムの子孫」という自己理解が「神である父の子」という自己理解と結びつけられて主張される(41 節)点が、主イエスご自身の「神である父の子」という自己理解とどのように相違するものであるのかを明らかにすることにあると見られる。主イエスの指摘によれば、「アブラハムの子」であり、同時に「神を父とする子」でもあることを自認するユダヤ人たちの言動は、実際には、神に属する者の言動とは言えない(47 節)。同じ方を「父」とする「子ら」は、その「父」から受けた「言葉」を共有し、また「わざ／行い」を共有するので、相互にそれを受け入れ合う者であるはずだ、というのである。それゆえに、ここでも「わたしの言葉にとどまる」(31 節)、「わたしの言葉を受け入れる」(37 節)、「わたしの言葉を聞く」(43 節)ということが、重要な判断材料とされている。

・「アブラハムの子」という自己理解は、当時のユダヤ人の中で広範に受け入れられていたと考えられ、他の新約文書中、殊にパウロ書簡でしばしば、論議の的として取り上げられている(マタイ 1:1、3:9、ルカ 3:8、19:9、使 13:26、ロマ 9:7、11:1、II コリ 11:22、ガラ 3:7、29、ヘブ 2:16、7:5)

来週の誕生日 (9 月 1 日~7 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-1「主イエスよ、われらに」は、I 341 番の歌詞を原曲に戻し、編曲を変更。作詞者 F・ヴィルヘルム II 世はザクセン=ワイマール公国の領主で音楽家。

作曲者不詳だが、チェコの宗教改革者フス(1369~1415 年)に遡るとも言われる。

- ・21-443「冠も天の座も」(I 124「みくにをとも宝座をも」)は、19 世紀英国教会司祭の娘エミリー・エリオットが、父の牧する聖マルコ教会の聖歌隊のために作詞。曲は、別の讃美歌集への採用に際して、この歌詞のためにマッシューズが作曲。
- ・21-79「みまえにわれらつどい」(= II 179)は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19 世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。

21-1「主イエスよ、われらに」

Herr Jesu Christ, dich zu uns Wend

1. Herr Jesu Christ! dich zu uns wend, / Dein' Heil'gen Geist du zu uns send: / Mit Hilf' und Gnad', er uns regier / Und uns den Weg zur Wahrheit führ.
2. Thu auf den Mund zum Lobe dein, / Bereit das Herz zur Andacht fein, / Den Glauben mehr, stärk den Verstand, / Daß uns dein Nam werd wohl bekannt.
3. Bis wir singen mit Gottes Heer: / Heilig, heilig ist Gott, der Herr, / Und schauen dich von Angesicht / In ew'ger Freud' und sel'gem Licht.
4. Ehr sei dem Vater und dem Sohn, / Dem heil'gen Geist in Einem Thron, / Der heiligen Dreieinigkeit / Sie Lob und Preis in Ewigkeit.

21-443「冠も天の座も」

Thou didst leave Thy throne

1. Thou didst leave thy throne / And thy kingly crown / When thou camest to earth for me, / But in Bethlehem's home / Was there found no room / For thy holy nativity: / O come to my heart, Lord Jesus; / There is room in my heart for thee.
2. Heaven's arches rang / When the angels sang, / Proclaiming thy royal degree; / But of lowly birth / Didst thou come to earth, / And in great humility: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
3. The foxes found rest / And the birds their nest / In the shade of the forest tree; / But thy couch was the sod, / O thou Son of God, / In the deserts of Galilee: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
4. Thou camest, O Lord, / With the living word, / That should set thy people free; / But with mocking scorn, / And with crown of thorn, / They bore thee to Calvary: / O come to my heart, Lord Jesus, / There is room in my heart for thee.
5. When the heavens shall ring, / And the angels sing / At thy coming to victory, / Let thy voice call me home, / Saying 'Yet there is room, / There is room at my side for thee; / And my heart shall rejoice, Lord Jesus, / When thou comest and callest for me.

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
Let us break bread together on our knees.
Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.
2. Let us drink wine together on our knees;
Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
Let us praise God together on our knees. [Refrain]